

今回の研修会では様々なことを学んだ。

一日目の最初に行った三菱商事では、社員の方々からどのような事業をしているのかについての説明を受けた。私は、三菱商事をはじめ、総合商社は海外の活動を中心にした会社で、自分の生活にはあまり関係がない会社だというイメージが強かった。

しかし、説明を聞くと、三菱商事はコンビニエンスストアや衣料品店など多くの事柄に関わりがあったり、海外の資源工場に投資して国内に資源を供給したりしており、生活に非常に密着した企業であることが分かった。さらに、東日本大震災の被災地支援を様々な形でしていた。また、表舞台にはほとんど登場しない、いわば「黒子」のような企業でもある。いくら目立たないといえども、黒子がいなければ舞台が成り立たないように、総合商社がないと社会が成り立たない。

海外でも戦後、日本の総合商社を真似した仕組みを作ったそうだが、中国でも欧米でも失敗してしまった。この、総合商社というシステムは日本人にしかできないのだ。日本の社会がここまで発展したのは総合商社のシステムがあってこそかもしれない、と思った。

その後、私は国立天文台へと向かった。国立天文台では東北大学出身の鈴木教授に質問させていただいた。その質問の中に「なぜ教授は天文学をされるのか」というのがあった。

教授は即答した。

「天文学が好きだからです」

私は将来、研究者になりたいと思っていたが、非常に参考になる言葉であった。研究者は決して儲かる職業であるとはいえない。しかし、自分の好きなものを一生突き詰めることができる。自分の好きなことを心行くまでできることは大変素晴らしいことなのだ。私は自分の好きなことを突き詰めることができる教授を羨ましく思った。ひと通り質問をさせていただいた後、天文台内を教授に案内していただいた。天文台内では人工衛星のパーツを作っていたり、機械の整備をしたりしていた。人工衛星のパーツはデータを打ち込んでコンピューターで作っているのかと思いきや、すべて人の手で作られていた。だからこそ、複雑な曲線を持った部品をつくれるのかもしれない。

また、機械整備をする部署ではアメリカにある著名な電波天文台に使う部品など、様々な重要な部品を整備していた。

手作りで作られた、装置「KAGRA」の部品。
穴の位置なども正確につくられている。

その後、ホテルに帰って夕食を取ったのち、二高OB・OGの東大生の方々からお話を頂いた。気さくな方々ばかりで、初対面でも積極的に会話できた。そこで、ある先輩が言った一言が印象に残っている。

「東大に入ってからが重要だからね...」

東大は理一、文一、というように最初に「科類」を選び、



その後学部学科に移っていく、という独特なシステムで勉強していく。科類から学部学科に行くとき（東大ではこれを「進学」と呼ぶ）、成績順で良い学部に移っていく。つまり、東大に入るまではもちろん、入ってから勉強しなければ良い学部に進学することができないのだ。その先輩は経済学部であったが、同じ科類の同級生が行った文学部は経済学部 비해、就職が難しいのだそうだ。ただ、勉強すればそれだけ良い学部に行けるので、文三から医学部に進学する、ということも不可能ではない。現にそのような進学をされた方もいたそうだ。東大に入るのがゴールではないと思い知らされた。

また、他の先輩はこのようなことも言っていた。「東大は他大学の完全上位互換ではない。」

東大というと、一般にすべてにおいて他大学に勝っているように見られる。もちろん、私もそう思っていた。が、東大の設立目的は「官僚となる人を育てる」であり、あまり研究などにはむいてはいない。また、分野別で見れば、東大より勝っている大学もあるそうだ。東大に入ることも全てではないのだ、とも思った。

二日目は終日、東大を見学した。

理学部を見に行く決めていたので、赤門や安田講堂にも目もくれず、理学部の建物に向かった。が、理学部に行ってみると、まだ開くにはまだかなり時間があつたので広い敷地を散策することにした。

まずは慌てていてよく見られなかった安田講堂を見上げる。テレビや教科書でしか見たことがなかったその建物がそこに建っていた。ここで安田講堂事件があつたのだな、と思うと何とも言えない迫力を感じた。

その後、近くにあつた、小説「三四郎」に出てくる池、三四郎池を見に行つた。まわりが木に囲まれた中で蟬の声が延々と響いていた。池の中を覗いてみると、ニシキゴイが優雅に泳いでいる。近くの立札によれば、生態系を構成するためニシキゴイを放流したらしい。校内施設を余すところなく研究に使用するところが東大らしいな、と思った。

そうこうするうちに、理学部が開いた。

まずは数学科に行つた。入ってみるとポスター掲示で研究成果が示されていた。

内容を見てみると、どうやらトポロジーの研究であることが分かつた。トポロジーとは、「柔らかい幾何学」と呼ばれ、比較的新しい学問分野である。私は基本的なことしか知らなかつたので、そこにいた東大生の方に多くのことを質問でき、良い体験となつた。

そして情報科学科の講演を見に行つた。内容は「学習するコンピューター」についてであつた。その講演の中で発表されていたあるロボットが印象に残っている。足だけの簡単なつくりのロボットであり、それを動かすコンピューターもどうロボットを動かせば立ち上がるのかはプログラムされていない。しかし、コンピューターによく動かせられた「報酬」としてロボットが一番高い点のy座標を与えるのだ。つまり、ずっと立っている状態を維持すれば多くの報酬が得られる、ということになる。すると、最初は全く動かせられなくても、何回も繰り返す中で多くの報酬を得ようとコンピューターが努力し、最終的には立ち上がるができるようになるのだ。

講演した教授によると、今まで条件が異なれば、いちいちプログラムを書き換えなければならなかつたが、このような学習する機能をもたせると、何回か練習すればプログラムを書き換えなくても状況に適應できるようになるそうだ。

コンピューターがそれだけ人間味をおび、色々な状況における様々な仕事を人間に取って代わる日も近いだろうなと思った。

講演を聞いた後、食堂へ向かい、東北大でも食べたカツカレーを食べた。しかし、そこでやっていたテレビは明らかに東北大のものと違つた。

東大の情報がつぎつぎと流れてくる。オープンキャンパス向けに東大の紹介ビデオを流しているのだろうと思

いきや、普通のテレビでもやっている CM やその日に放送するバラエティー番組の宣伝も流れている。そうかと思うと、東大生が出ているパロディー番組も流れてくる。よく見るとテレビの下に「キャンパス TV」と銘打ってあった。東大用につくられた番組や東大生が作った番組が CM 付きで流れていたのだ。社会的な評価が高い東大ならではのシステムだなと思った。

昼食を食べた後、土産を買おうと東大生協へ向かった。すると、入り口付近に「私も一言」という、生協に対する利用者の学生の要望を書いた紙が貼ってあった。

それを読んでみると、皆ユーモラスに満ちたもので、店員さんのその要望に対しての返しも慣れたものだった。決して勉強一辺倒ではない東大生の姿がよく表れているなど思った。

土産を買った後、理学部で数学に関する講演があったのでそれを見に行った。

内容はやはりトポロジーについてであった。

一番印象に残ったのは、「おなじ大きさの球をそれらと同じ大きさの一つの球に重ならないでいくつ付けられるか」という問題についてであった。非常にシンプルな問題なのだが、20 世紀まで未解決であった問題だ。普通にやれば 1 2 個付けられるのだが、頑張れば 1 3 個付きそうな気もする。長い間、12 個か 13 個か議論が続いていたのだが、最終的に 12 個付けられるということで決着がついたそうだ。この話を聞き、身近なところにもまだわからないことが沢山あるのだ、と思った。

今回の研修会では東大ばかりではなく、社会全体や人生についての様々な知識を学ぶことができた。今回の経験を糧にしてこれからの生活や進路を見直したいと思う。